

論文

Debussy の音楽に見るぼかしの手法

福 田 由紀子

The “Ambiguity” Techniques of Debussy’s Music

FUKUDA Yukiko

目 次

- I はじめに
- II 印象派の手法
 - ぼかしを増幅させる手法 —
- III 前奏曲集第2巻より「花火」の分析
- IV 結び

I はじめに

タイトルの「ぼかし」については、言葉そのものが誤解される心配があるので始めに一言したい。

世間一般では「ぼかし」とは「いい加減」という意味に捉えるであろう。だからと言って、このタイトルを見て、Debussy は調性や和声をいい加減に書いているのだと勘違いしないでいただきたい。

「ぼかし」とは、多義的な曖昧性ということである。具体的には調や和音が色々に解釈できるということである。

「ぼかし」の原理は「トリスタンとイゾルデ」^[註1]あたりからきている。

今回取り上げる印象派の Debussy (Claude Debussy ・ 仏1862～1918) の作品・前奏曲集第2巻の「花火」は、調性音楽であるが、西洋音楽で一番重要な調性をわざとぼかしているのである。

何故ぼかすのかといえば、印象派的な雰囲気を漂わせるためである。

この「ぼかし」を増幅させる手法がある。

それは3全音調、半ずれ調、複調、教会旋法や5音音階、全音音階などである。dur や moll を主体とする古典派やロマン派には、あまり見られない手法である。特に Debussy は、教会旋法や5音音階、全音音階を好んで用いている。

また、後期ロマン派から近代にかけて、異名同音的転義の可能性が新たに増えたことも「ぼかし」を増幅させている。

「ぼかし」の手法を用いるということは、調性をしっかり踏まえていることが前提であり、調性を知り尽くした名人が、巧妙に使ってこそ「ぼかし」が成り立つのである。

Debussy が「ぼかし」をいい加減に使っているのではなく、緻密な構成と音楽の調性を踏まえた上で用いていることを、前奏曲集第2巻より「花火」の分析を通して証明していくことにする。

II 印象派の手法

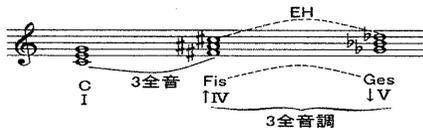
「ぼかし」を増幅させる手法である。総合和声より一部抜粋する。詳しくは『総合和声』（島岡譲 執筆責任・音楽之友社出版）472～485頁を参照していただきたい。

3全音調

3全音とは「3つの全音から成る音程」の意で、増4度ないし減5度を意味する。3全音はオクターブを2つの等しい距離に折半する。



主音が3全音の関係にある調を3全音調と呼び↑IVまたは↓Vと表記する。



半ずれ調

古典派・ロマン派の調関係では、半音関係は常に短2度であり、増1度ではない。例えばC-durと半音関係にある調はDes (♭II) か H (VII) である。仮にCisまたはCesと記載されていても単に異名同音の書き換えに過ぎない。

近代以降、ある調Xをそのまま半音（増1度）高く、または低くずらすことが行われるようになる。これを〔調Xの〕半ずれ調と呼び、↓X調・↑X調と表記する。半ずれ調は必然的に半ずれ和音を生じ、その前後の和音との間には、半ずれの関係（半ずれ進行）が生ずる。



半ずれ調

Ces ← C → Cis
 ↓ 1 調 (↓ x 調) 1 調 (x 調) ↑ 1 調 (↑ x 調)

全音音階

1 オクターブを6個の全音に等分割する音階を全音音階という。

全音音階

さまざまな調の ∇_7 (全音音階和音はこのように表記) の構成音とみなしうる。

複調

2つ以上の調が同時に出現することを複調という。2つの調は全く対等という訳ではなく、一方が主 (本来調) で他方が従 (偶成調) であることが多い。

倚和音調

C: I 原和音と同時に響く時に複調となる
 C: I
 [H: I
 C: I

上部付加和音調

* Ces = H
EH

[Ges: V₇
G: I

または [Ges: V₇
C: V₇

教会旋法

長調や短調などの普通の音階とは異なるが、Debussy は調性の枠の中にもうまく組み込んでいる。

組み込んだ場合の
調性的扱い

<p>ドリア旋法</p>	d-moll +IV
<p>フリギア旋法</p>	a-moll ∇ これだけは e-moll に ならない
<p>リディア旋法</p>	F-dur ∇
<p>ミクソリディア旋法</p>	G-dur ∇ ₇
<p>エオリア旋法</p>	固有の a-moll
<p>ロクリア旋法</p>	
<p>イオニア旋法</p>	C-dur

5 音音階

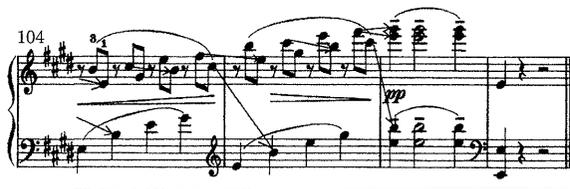
5つの音で成り立っているメロディー。5音の中、和音外音をゆれ（転位音）とみなすことで7音（3和音）組織に同化しうる。

Debussy 作曲アラバスク・沈める寺などに用いられている。

Debussy: アラバスク1番

レはドにラはソに間接解決。(移動ド読み)

E: I VI (刺繍和音) I



沈める寺 ゆれと解決を線で示す

C: V

異名同音の書き替え

Debussy 等の近代和声には異名同音の書き換えが多い。ここでは異名同音的転換ではなく、和音も調も譜面上そっくり書き替えることを指す。これは、たんに記譜上の便宜にすぎないが、やはり「ぼかし」を増幅させる要因の一つとなる。

異名同音的転義の新たな可能性

古典派やロマン派では減7⇔減7、属7⇔増5-6の異名同音的転義が用いられていたが、ぼかしの手法として増3和音⇔増3和音、増3-4⇔増3-4の異名同音的転義も多用されていった。

《増3和音⇔増3和音》

《増3-4⇔増3-4》

1個の増3和音は3通りの

1個の増3-4は3全音関係の増

異名同音的把握が可能である。

3-4と異名同音の関係にある。

異名同音

以上、ぼかしを増幅させる手法として Debussy の音楽にも用いられている。

III 「花火」の分析

分析楽譜を載せる。楽譜は DURAND 版を用いる。

序奏 *Modérément animé* 程よく活発に
léger, égal et lointain 軽く音をそろえて遠くから聞こえてくるように

Ges-dur? b-moll? es-moll? Des-dur?

実は F-dur?

※この分析については後で説明します。

(Des: ∇_9)

3 es - moll ?

5 8^{va} es - moll ?

7 *marqué* はっきりと

8 *pp*

marqué

Des-dur?

9 *marqué*

8 *pp*

marqué

11 *es - moll ?*

8 *sempre pp*

だんだん近づいて
en se rapprochant peu à peu 聞こえるように

13

15

cresc. molto

17

f *mg.*

ritenuto

p *piu p* *pp*

21

f: II^1 ——— $8^{\text{a}} \text{b}^{\text{a}}$ V_7^1 ——— V ———

23

cre - scen - do

第 I 部 ①

25

f

F: V_9

27

f 非常に浮き出して
très en dehors

29

f *ff*

b d c

Fis: V_9 G: V_9

31 $\frac{6}{8}$

f

a

F: ∇_9

33 $\frac{6}{8}$

p

m.d.

$\circ\nabla_9$ | $\circ\nabla_9$ | $\circ\nabla_9$

più p

m.d.

f

a

[15]

Ges: ∇_7^2

36

f

b d 拡大

b 拡大 c 拡大

38 (8)

più f

a

8

ff

39 (8)

8

ff

8

V⁷ | II₉ | | II₉ | | II₉ | | II₉ |

40

molto dim.

2

m.d. *m.d.* *m.d.*

| II₉ | | II₉ |

第Ⅱ部 ©¹

41

Des: ∇_7 | ∇_7 | ∇_7 | ∇_7 | II

43

∇_7 | ∇_7 | Ces: ∇_7 | C: ∇_9^4

45

des: ∇_7^2 | ∇_7 | ∇_7^2 | ∇_7

※(♯) 後で説明します。

47 Scherzando

p subito

mf

p

II²₇ | V³₉ | h: II²₇

49

piu p

pp

poco cresc.

e: V²₇ V⁴₉ V²₇ V⁴₉ V²₇ V⁴₉ V²₇ V⁴₉ V²₇ Es: V²₇ Es: V²₇

52

molto cresc.

f

strident

pp

f

strident

pp

響きを残して
3 *pp* (*laissez vibrer*)

3 *pp* (*laissez vibrer*)

V²₇ V²₇ V²₇ V²₇ Es: Es: G: V⁹₉

Retenu

8^a b^a...! 8^a b^a...!

55 遅くする

©² 元のテンポ
Mouv^t (plus à l'aise) もっと楽に

57

雄弁に
volubile

sempre pp

a反 a a反

cis: ∇_7
(des)

a a反 a

低音は軽く、
調和した響きを持って

les basses légères et harmonieuses

fis: II_7^1

G: ∇_9

60

pp

a反 a

Rubato
8^{va}

pp *glissando m. d.* *m. s.*

p

fis: II_7 A: ∇_9 C: I

8^{va} b^a

62 *pp* *simile* *pp* *glissando m.d.* *p* *pp* *p*

64 *pp* *simile* *pp* *es: I* **第三部** **⑥** *Doux et harmonieux (Molto Rubato)* 優しく調和した響きを持って

66 *pp* *f* *ff* *Quasi cadenza m.d.* *m.g.* *Fis: V* *(Ges)* *Incisif et rapide* 鋭く、そして速く *Quasi cadenza* *m.d.* *m.g.*

pp *p* *cresc. molto* *f* *V₉²*

Tempo (Rubato)

68

Fis: V_9^1 _____

70

Lucif b d c b d c

Mouv b d c b d c

f *più f* *pp subito*

V_9^4 V V_7 V_7^3

Ges: G: As: A:

V

Fis: G: As: A:

72

b d c b d c

pp

G: V_9^4 V_9 V_9^4 V_9 V_9^4 V V_7 V_7^3

Ges: G: As: A:

74

C: ∇_7^2 Ces: ∇_7^2 ————— C: ∇_7^2 Ces: ∇_7^2 —————

76

78

①² Mouvt' élargi ゆるやかなテンポで

éclatant 光輝いて

molto cresc.

8^{b, 4}..... 8^{b, 4}

F: ∇_9^3

80

f *p subito* *molto dim.*

8^a b^a ...

Ges: V₇

82

f

8^a b^a ... 8^a liassa ...

F: V₉³

84

ff *piu f e cresc.*

$\nabla \nabla \nabla \nabla \text{---} \circ \nabla_9$ $\nabla \circ \nabla_9$ $\nabla \circ \nabla_9$ $\nabla \circ \nabla_9$

F: Ges: G: As: A: B: H:

後奏

87 *Plus lent* より遅く

冒頭の曖昧さ再現

大変遅くする
Tres retenu

(Des: ∇_9)

90 *Encore plus lent* もっと遅く

de très loin 大変遠くから

下半ずれ調

「ラ・マルセイエーズ」の引用

[*trem.*]

8^a bassa

aussi léger et pp que possible 出来る限り軽く、そして *pp* に

↓ (I)

Des: I

95

8^a bassa

(... Feux d'artifice)
... 花火

この曲には、様々な種類の花火が描かれており、曲の最後にはフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」の断片が遠くから聞こえてくるという演出がなされている。このことから7月14日のパリ祭（革命記念日）で打ち上げられる花火^{【註2】}の様子を、趣向を凝らして作曲したと考える。

序奏（1～24小節）

冒頭は、多義的で曖昧な始まり方をしているために、調の特定ができない。出だしからぼかされている（譜1）。

第1、2小節に於いては、左手はF-durのようでもあり、右手はGes-durのようでもある。合わせるとb-moll、es-moll、あるいはDes-durのようにも聞こえてくる。

冒頭の分析楽譜の第1小節には、(Des: ∇_9)と記入したが、実際はこの時点ではまだ分からないのである。しかし、分析楽譜を載せるということで、あえて調の正体を明かした。

ここは、花火の煙がはるか彼方に立ち上っている描写か、あるいは、パリ祭における群衆のざわめきの描写にも感じられる。

(譜1)

1 曖昧な調 Ges-dur? b-moll? es-moll? Des-dur? etc?

F-dur?

第3、第5小節では、上段にD音が鳴らされ、第4、第6小節では、上段にAs音が鳴らされる（譜2）。D—Asの減5は ∇_7 の目印なので、今度はes-mollのようにも聞こえてくる。上段のD音、As音は、はるか彼方で上がっている単発型打ち上げ花火の描写のようである。

(譜 2)

第7、第9小節では、バスにAs音が出てくる(譜3)。この低音を根音として捉えると主調はDes-durではないかとの考えが強まり、今まで浮上してきた調は消されてしまう。上段のC音はDes-durのⅤの第3音、D音は第5音(Es音)の下がった音、つまり下変と捉えると、ここの和音はDes-durのⅤ₉である。

(譜 3)

しかし、第11小節からは、決定打のAs音がなくなるため、再び *es-moll* のようにも感じられ、調性はぼかされてしまう（譜4）。

第3～6小節（譜2）と第11～14小節（譜4）を比べると、後者は *pp* のままで漸増感を持たせるために、上声部はシンクペーションで書かれている。ここに構造アゴーギク【注3】がみられる。

（譜4）

第15小節から下方の32分音符の旋回音型が3オクターブにわたって上行する（譜5）。花火が白い線を描きながら打ち上げられていく描写だと考える。

(譜 5)

15
cresc. molto
8
8

第17小節は、今までとは音型が変わり、黒鍵のグリッサンドで下行する(譜6)。花火が光の尾を引きながら燃焼し、第18、19小節の重音は飛び散った火の粉の表現ではないかと想像する。

ここの調判定は困難なので後のつながりから見ていくことにする。第25小節(譜8参照)は、はっきり F-dur と分かるので、その前の第20小節は、同主調の f-moll の V ではないかと見当を付ける。

(譜 6)

17
8
m.g.
rituando
Ces = H
B → H → C のバスの動き
ppp
21

f: B¹ — 8^a B^{b1} — V¹ — V —

23

第20小節からは、単に重音が響いているだけではなく、f-moll の V の多層的なゆれがある（譜7）。下のゆれ、上のゆれ、一緒になった全体的なゆれである。

（譜7）

20 上のゆれ ○印は全体的なゆれ

下のゆれ

f-moll V

下のゆれ

上のゆれ

全体的なゆれ

前に戻って、第17小節はどのように分析するかということになるが、この黒鍵グリッサンドは第18小節の1拍目のB音に落ち着くので、ここまでをf-mollのⅤと捉える。

第18、19小節は、右手のCes音をエンハーモニックでH音と読み替え、これを低音と捉えるとf-mollのⅤになる。

第17～20小節までのバスの動きはB→H→C音と半音上行する。

第20～24小節は第Ⅰ部から始まる華麗な「花火ショー」をいざなう

花火が打ち上がっていると想像する。

【序奏】で打ち上がった花火は「花火ショー」のデモンストレーションだったのではないかと考える。

第1～16小節までの調は曖昧で分からないままである。

【第I部】から【第III部】までの「花火ショープログラム」を326頁に載せる。ここに載せた花火名は、音型や強弱や曲の雰囲気から想像して付けたものである。花火名と照合させた譜面もプログラムの後に載せた。説明と併せてご覧いただきたい。

【第I部】 (a)¹ (25～34小節) (b)¹ (35～40小節)

(a)¹ (25～34小節)

いよいよ「花火ショー」が始まる。

第25小節からは、陽転してF-durのV₉になる(譜8)。序奏でF-durの調性も否定できなかったが、ここにきて伏線になっていたことが分かる。

第25小節には下行形、上行形の大きな谷型の音型が用いられている。V₉の第9音(D音)は分散和音であるけれども、経過音のように聞こえる。この流れるようなラインは、滝をイメージしたナイアガラの仕掛け花火を想像させる。第30小節は拍子が8分の2拍子に変化するだけでなく、音型が山型になる。

(譜8)

【第I部】 (a)¹ 下行

25 8 谷型 上行 8 8

F: V₉

27 8 8 8
 非常に浮き出して *très en dehors*
 f

29 8 8 8
 山型
 上行 下行

30 8
 Fis: V₉ G: V₉ F: V₉-

ナイアガラの仕掛け花火が上がっている一方で、第27小節からの左手に新しい音型が出てくる。打ち上げ花火ではないかと想像する。曲中、何度も出てくる音型なので、これらに a、b、c、d の記号を付ける。

音型 a が基本であり、そこから全ての音型は派生している（譜 9）。音型 b は音型 a に倚音が付随した形であり、音型 c は音型 b のつなぎ替えである。音型 b と音型 c を合わせた形が音型 d である。音型 d の中の音型 b と音型 c は調が半音関係で動いている。

第30小節では、音型 d の中の音型 b は Fis-dur、音型 c は G-dur とそれぞれ半音上行している。この小節の前後は共に F-dur であるので、音型 d は一種の刺繍和音、あるいは刺繍調のように逸脱して元に戻ることができる。ここに出てきた音型を基本音型とする。

尚、分析が困難に思われる曲は、分かりやすい音型を階名で歌うと、比較的容易に分析できる【注4】ので、階名【注5】を書き込んだ。

(譜 9)

全てaから派生している

※単旋律ではVであるが、曲中ではV₉の和声分析である。

第32小節は8分の3拍子に変化するが、下行の音型から短いしだれ柳花火ではないかと想像する。第33小節からは8分の4拍子で、ナイアガラ花火に戻るが、第25小節と比べると谷型の音型が1小節に2つ入り音域も低くなっている。

第30～33小節まで、1小節ごとに拍子が変わっている (譜 8・譜10)。

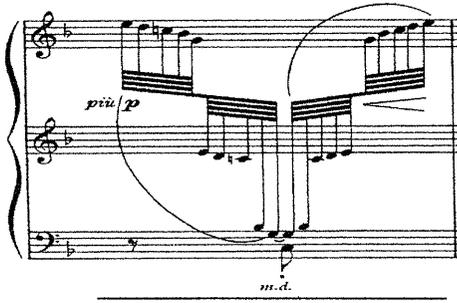
第33小節の2拍目と4拍目、及び第34小節の2拍目に書かれている Cis 音を、エンハーモニックで Des 音と読み替えると $\circ V_9$ になり陰ってゆれているのが分かる。花火の色彩の変化を表現していると想像する。

(譜10)

F: ∇_9

F: ∇_9 | $\circ V_9$ | $\circ V_9$ | $\circ V_9$ | $\circ V_9$ |

ゆれ | ゆれ | ゆれ | ゆれ



① (35~40小節)

第35小節から Ges-dur に変わる (譜11)。F-dur と同様に、序奏で Ges-dur の調性も否定できなかったが、ここに来て伏線になっていたことが分かる。

左手の2分音符のG音は、As の下変 (第5音のAs音が半音下がった音) であると解釈すると $\nabla\frac{7}{2}$ の和音になる。

左手は上行形、下行形の山型の音型に変わるが、これはセーヌ川に映った逆さナイアガラ花火の描写ではないかと想像する。

右手に音型 a、b、d がオクターブではっきり現れることから、第27小節の打ち上げ花火より、大きく色鮮やかに浮かび上がった様子が想像できる。

音型 a も音型 b も、階名から Ges-dur の $\nabla\frac{7}{2}$ の分散であることが分かる。音型 d は拡大されている。音型 d の中の音型 b も音型 c も、基本音型のように半音上行はしていないので、調はそのままである。音型 c の最後の階名は ∇ の下変なので「↓レ」と書いた。

① で使われていた音型 a (譜9参照) は、根音の「ソ」から始まっていたが、ここでは3度高い第3音の「シ」から始まる。階名を読むことにより移度も分かる。

第38小節の音型 a の打ち上げ後は、しだれ柳花火の打ち上げ時の描写で、反行形で書かれている。ここまでは、バスはG音である。

(譜11)

35 ^(b) a

f シンファ

G=Asas=Asの下変(5)

Ges: ∇_7^2

36 b d 拡大 c 拡大

f シンファ

シン ソ ファ ラ ソ ↓

38 (g) a

シ ン ファ

piu f

8

第39小節では低音のGが消える。第40小節では、バスにAs音が現れるので、低音空白のこの第39小節は、潜在的にAs音が響いていると考
えて分析する(譜12)。すると、ミレドラの個所は II_9 である。

(譜12)

39

8 シラソファシ
ミレドラ

低音に潜在的にAsが響いているとすれば

Ges: V_7^2 | II_9 | II_9 | II_9 | II_9

40

次の◎¹で説明します

molto dim. m.d. m.d.

ここで本当のAs音

II_9 | II_9

第Ⅱ部 (C)¹ (41~56小節) (C)² (57~64小節)

この第Ⅱ部は中間部にあたる。連発小型花火やロケット花火が打ち上げられ、後半は、次の花火の準備部分である。

(C)¹ (41~56小節)

第40小節の Ces 音 (□印) が第41小節で C 音 (□印) に変わっただけで全部の位相が変化する。

第41小節は Des-dur の V_7 である (譜13)。序奏で Des-dur の調性も否定できなかったが、ここに来て伏線になっていたことが分かる。

ここでは純粋な分散和音ではなく、音階が入っている。

第41小節の1拍目の「ラファレ」は偶成で II であるが、この「ラ」の音は2拍目の「ソ」に解決している。Des-dur のドミナントであるが、その中のちょっとした和音の変化にも注意を向けたい。

第42小節の右手の音型 a は、装飾の形をしていて、階名は「ラレ」

であり、第43小節の音型 b は 3 連符が使われていて階名は「ラミレ」である。

第27小節の音型 a、b は「ソレ、ソミレ」でⅤ、第35小節の音型 a、b は「シファ、シソファ」でⅤ₇であったが、今回はⅡである。「ラ」が入ることにより憂いを含んだ感じになる。強弱記号も *p* であることから、色合いが派手ではない、小ぶりの打ち上げ花火かもしれないと想像する。左手はナイアガラ花火である。

第44小節の音型 b は Ces-dur、音型 c は半音上行で c-moll である。この半音上行移動は dur と moll の関係であり、基本音型 d とは異なる。

(譜13)

第Ⅱ部 ©¹

41

解決

ラレ

ラレ

Des: Ⅴ₇ | Ⅱ

43

ラミレ

シソファ ソファシ

クリスタル

Ces: Ⅴ₇ C: Ⅴ₉⁴

第45小節からは Des-dur が陰って des-moll になる (譜14)。この小節の3、4拍目は E-dur のように見える。des-moll で書くとダブルフラットが付いて分かりにくくなるため、エンハーモニックの書き換えでこのように書いたのではないかと考える。本来の調である des-moll で書いた楽譜を載せる (譜15)。

ここの音型 a と音型 c は両方とも和音で書かれている。音型 c の最初の音を倚音と考えると和音は II_7 、つまり導7の和音になる。しかし、ここには低音が書かれていない。そこで上方の右手の最低音 A を低音として考えてみたが、これでは急に飛び過ぎて不自然である。次に、1、2拍目の低音 D をそのまま置いてみたが、これも上方の和声と合わない。それで低音を半音移動させ、Dis 音を補って考えることにした。

(譜14)

45 (a) シン シン シラ シラ シン シン シラ シラ

des: V_7^2 II_7 V_7^2 II_7

(譜15)

45 シッ シラ シラ シラ シッ シラ シラ シッ

des: V_7^2 II_7 V_7^2

第47小節以降は音型 c が展開されていく (譜16)。連発小型打ち上げ花火が、次々に小爆発する感じで、間隔なしに打ち上げられる。

(譜16)

第47小節の1拍目は、右手のA音が最低音になるので des-moll の II_7^2 である。2拍目は2度上にずれて V_9^3 である。前後を II_7^2 に囲まれた刺繍和音である。

第47小節を des-moll に書き替えた譜面を載せる (譜17)。

(譜17)

第49小節からは e-moll である (譜18)。フラットの付いている音は、エンハーモニックで読み替える。第49、50小節の2拍目の V_9^3 は V_7^2 の間でゆれている。また、それぞれの拍の頭は全て倚音である。

第49小節のエンハーモニックの書き替え譜と4声体の還元譜、及び倚音を除いた最終還元譜を載せる (譜19)。

(譜18)

49

piti p

mp

e: V_7^2 V_9^4 V_7^2 V_9^4 V_7^2 V_9^4 V_7^2 V_9^4

(譜19)

49

エンハーモニックの書き替え

e: V_7^2 V_9^4 V_7^2 V_9^4

49

4声体への還元
右手の最上声は8度重複
なので省略

倚音を全部取り除いた
最終還元

第51、52小節も音型cの展開が続く(譜20)。拍の頭は倚音であり、2拍目、4拍目はEs-durの V_7^2 でゆれの音である。第51小節のエンハーモニックの書き替え譜を載せる(譜21)。

第52小節は左手に音型aが出てくる。音程やリズムは少々異なるが同じグループとして扱う。音型aが加わることで曲が盛り上がる。

(譜20)

51

e: V_7^2 $\underline{V_7^2}$ V_7^2 $\underline{V_7^2}$ V_7^2 $\underline{V_7^2}$ V_7^2 $\underline{V_7^2}$
 Es: \underline{Es} \underline{Es} \underline{Es} \underline{Es}

(譜21)

51

e: V_7^2 $\underline{V_7^2}$ V_7^2 $\underline{V_7^2}$
 Es: \underline{Es} \underline{Es}

第53～56小節は音型も調も変わる (譜22)。

金切り声のようという表現から *f* の部分はロケット花火の発射時の音ではないかと想像する。

2音ずつに分けて書かれているが、寄せ集めると全音音階和音である (譜23)。低音のDを根音(基音)と捉えるとG-durの全音音階和音(表示はG: ∇_9)になる。 ∇_9 の上変の音はB音(↑レ)、 ∇_9 の下変の音はAs音(↓レ)である。

(譜22)

53

f *strident* *pp* *pp* *pp* *pp* *pp* *pp*
 金切り声のように
 響きを残して
pp (*laissez vibrer*) *pp* (*laissez vibrer*)

G: ∇_9 $8^{\#}b^{\#}...i$ $8^{\#}b^{\#}...i$

Retenu
55 遅くする

(譜23)

53 2音ずつに
分けられている 寄せ集める

全音階和音

全音階

全 全 全 EH 全 全 全

② (57~64小節)

第57小節は cis-moll に転調する (譜24)。cis-moll は des-moll のエンハーモニックであり、この段階では仮定であるが、主調であるかもしれない Des-dur の同主短調でもある。

pp であること、音型 a や音型 a の反行形が用いられていることなどから、**第Ⅲ部**の打ち上げに向けての準備部分ではないかと考える。

第57小節の1、2拍目頭の Cis 音は倚音であり、3拍目の His 音に解決する。和声は V_7 である。

第59小節前半は、fis-moll の II_7^b である。この中の Cis 音は倚音だが、3拍目の C 音に半音階的に解決している。後半は G-dur の V_9 である。第5音の下変は、エンハーモニックの Gis 音で書かれている。

(譜24)

©² 元のテンポ
Mouv^t (plus à l'aise) もっと楽に

57 *solabile*
雄弁に
sempre ppp

a反 解決 a a反

cis: ∇_7
(des)

EH EH
EH EH

低音は軽く、
調和した響きを持つて
les basses légères et harmonieuses

fis: II_7^1 G: ∇_9

第60小節は第59小節を2度上にずらしている (譜25)。調が一つ上がって gis-moll の II_7^1 、A-Dur の ∇_9 になる。

(譜25)

60

解決 a a反

EH EH
EH EH

pp

gis: II_7^1 A: ∇_9

第61、62小節は、各小節に3全音関係の調が2か所ある（譜26）。分析はC-durのIとするが、その理由は、3、4拍目を上声だけのゆれとみなすからである。それぞれ、白鍵のグリッサンドが用いられている。

第63、64小節は短3度上のes-mollで書かれている。前の小節と同様に3全音関係の調が2か所ある。こちらは黒鍵のグリッサンドが使われているため響きが異なる。

ppで書かれていることや、音型aの使用、さらに新要素のアルペジオや3全音関係の調を用いていることなどから、今度は「**第三部**」へ向けてのテスト打ち上げではないかと想像する。

第65小節ではFis-durになる。これはエンハーモニックの書き換えでGes-durと同じであるので、第61小節からはC—es—Gesと短3度ずつ上がっていることになる。

（譜26）

61 Rubato 8^{.....} ゆれ a 3全音 3全音 3全音 C: I

62 8^{.....} 3全音 3全音 es: I

63 8^{.....} 3全音 3全音 es: I

64 8^{.....} 3全音 3全音 es: I

65 8^{.....} 3全音 3全音 Fis: VII (Ges)

第三部 (b)

第Ⅲ部 (b)² (65~78小節) (a)² (79~89小節)

準備部分も含めて「花火ショー」最高の盛り上がりを見せる。

(b)² (65~78小節)

第65小節は Fis-dur の ∇_9^{\flat} である (譜27)。第67小節のバスまでは ∇_9 中の第3音 (Eis) と第7音 (H) が交替して、3全音で動いている。

第65、66小節は、しだれ柳花火をイメージさせる下行音型の後、音型 a の打ち上げ花火が上がる。しだれ柳型打ち上げ花火と想像する。第67小節と雰囲気の違いを出すために、ここはまだ *pp* で書かれてある。

第67小節は、いきなり *f* で、音型 d の打ち上げ花火が上がる。音型 c は半音移動して G-dur になる。Quasi cadenza では G-dur の $\circ\nabla_9$ の分散和音が駆け上がるが、頂点へ向かう前の4音 (F、A、C、F音) からは、調性が変わり b-moll の ∇ になる。フェルマータの後の *pp* から小節の最後までは b-moll の ∇_9^{\flat} である。右手の最上の F 音は、倚音 (クリスタル^{【注6】}) で、空中から星がキラキラ降ってくる様子がアルペジオで美しく表現されている。Quasi cadenza 内での音色を区別して弾きたい。

(譜27)

第Ⅲ部 (b)² Doux et harmonieux (Molto Rubato) 優しく調和した響きを持って

65

66

Fis: ∇_9 (Ges) Incisif et rapide 鋭く、そして速く Quasi cadenza

G:V $\circ\nabla_9$ b:V

クリスタル

V_9^2

第68、69小節は、第65、66小節と同様に Fis-dur である (譜28)。第70小節は、音型 d が 2 回繰り返され、半音上行で調が移動していく。打ち上げ花火が次々に上がる描写である。

(譜28)

Tempo (Rubato)

68

Fis: V_9^1

Incisif

70

V

Fis: G: As: A:

第71~78小節は再び pp になるが、クライマックスに向けての最後の備えをしていると想像する。第75小節までは音型 d が多用されている。

第71小節は左手がトレモロになっているが、それぞれの拍の頭の音

を和声の音とみなして分析する（譜29）。1拍目、3拍目の Dis 音は Es 音に読み替える。

第72小節の左手の1拍目、3拍目の Dis 音は倚音と捉えて分析すると E 音に解決するので G-dur の V_9^4 になる。この E 音は第9音なので次の拍の根音の D 音に解決する。

第73小節は第71小節と同じである。

（譜29）

71 *Mouv't* *pp subito*
シソファラソシ シソファラソシ
読み替え (b) 読み替え (b)

V_9^4 V V_7 V_7^3
Ges: G: As: A:

72 *pp*
シソファラソシ シソファラソシ
解決 解決

G: V_9^4 V_9 V_9^4 V_9 — V_9^4 V V_7 V_7^3
Ges: G: As: A:

第74、75小節は1拍目が C-dur の V_9^4 で、2拍目は Ces-dur の V_9^4 である（譜30）。音型 c の逆行形が新たに用いられる。

第76～78小節までは Ces-dur の V_9^4 が続く。音型 c と音型 c の逆行形だけが使われ、徐々に低音に向かって音量が増していく。あたかも噴射前の地鳴りのようである。

(譜30)

C: $\nabla \frac{2}{7}$ Ces: $\nabla \frac{2}{7}$ ————— C: $\nabla \frac{2}{7}$ Ces: $\nabla \frac{2}{7}$

①² (79~89小節)

花火ショーはいよいよ最高潮に達する。

第79小節はF-durである(譜31)。これは前の小節のCes-durから見ると、3全音の関係で繋がっているとも解釈できるが、偶成解決とも解釈できる。一例を挙げておく(譜32)。

第65小節とは音型も強弱も対照的に、*f*で下方から勢いよく上がって炸裂する描写である。ロケット型打ち上げ花火であろうと想像する。

第81小節2拍目の音型cは、半音上行してGes-durになる。音型dがオクターブで *più f* で書かれていることから、今までの中で一番大きな打ち上げ花火が上がり炸裂したと考える。その後、尾を引いて散ってい

く様子が音型cで表されている。

(譜31)

79 a^2 Mouvt. élargi ゆるやかなテンポで a
 éclatant 光輝いて

80 b c d c b a
 ソレ ソレ ソレ ソレ ソレ ソレ
p *subito* *molto dim.*

F: V_9^3 Ges: V_7

(譜32)

偶成解決

Ces: V_7^1 F: V_7^3

これは偶成解決の一例で原曲と一致している訳ではない。

根音関係で捉えるよりも、ずれていると偶成的に捉えた方が分かりやすい。

声部別4段譜

増1度(半音階進行)

EH

短2度

同音(完全1度)

Ces: V_7^1 F: V_7^3

第82、83小節は第79、80小節と同じである (譜33)。

(譜33)

82

ソレ

ソミレ

$F: \nabla \frac{3}{8}$

第84小節は全て ∇ の根音で半音上行し、第85、86小節は ∇ と $\circ\nabla_9$ が繰り返され半音上行している (譜34)。これらの F-dur から H-dur までの半音上行は緊迫感を出している。

第85、86小節は、バスの上に減7の和音が響き、その直後に鳴らされる音がクリスタル和音である。和音中の倚音は一般には下行解決するが、ここでは上行解決している。また、倚音への解決も珍しい。上行解決は例外であるが、非常に緊張感が強い。この緊張感を出すためには右手は音型bで捉えなければいけない。音型cで捉えると下行してしまい緊張感がなくなってしまうからである。ffで音型bを畳みかけていることから、色彩を変化させて次々に打ち上がる速射連発花火のスターマインを想像する。最高の盛り上がりである。

(譜34)

84

クリスタル

クリスタル

解決しない

rit. f e cresc.

減7→

減7→

減7→

減7→

音型cで捉えるとこのようになり緊張感がなくなる。

$\nabla \nabla \nabla \nabla \circ\nabla_9 \nabla \circ\nabla_9 \nabla \circ\nabla_9 \nabla \circ\nabla_9$

F: Ges: G: As: As: A: B: H:

「花火ショー」の最後は、三尺の大玉がドカーンと打ち上がる（譜35）。第87小節の左手がピアノの最低のA音を鳴らし、炸裂の様子を白鍵と黒鍵のグリッサンドで表現している。最後にふさわしく、ピアノの端から端までを使って、大きさやボリューム感を出したかったのではないかと考える。上の黒鍵グリッサンドでGesを導き、下の白鍵グリッサンドでFを導いて、後奏につないでいる。

(譜35)

87 (A)

ritardando

mf

ff

8va

(Des: ∇_9)

後奏 (88~98小節)

右手は Ges-dur、左手が F-dur で、冒頭の曖昧さと同じである（譜36）。序奏の短縮再現になっている。右手のD音は、第89小節の4拍目のH音につながりやすくするため付け加えられたと考える。

(譜36)

後奏

88 Plus lent より遅く

mf

p

pp

大変遅くする Très retenu

(Des: ∇_9)

第90小節の左手のトレモロは Des-dur の I である（譜37）。後奏が Des-dur であることから、曖昧な序奏は Des-dur であったことがここ

にきてようやく判明する。ずっと様々な調の V の和音が使われてきたが、ここでやっと主調 Des-dur の I に落ち着く。

「ラ・マルセイエイズ」^{【注7】}の断片は、第91～95小節の間、主調 Des-dur の下半ずれ調 (C-dur) である。この間、音型 a も音型 b も C-dur であるが、音型 c は第96小節で半音上行して Des-dur に戻る。

「ラ・マルセイエイズ」の最後の E 音は、C-dur の名残である。Des-dur の第3音 (F 音) が下にゆれた音と考えられるので下方転位であるが、この音が F 音に解決することはない。しかし、それとは無関係に第96、97小節では、オクターブで右手の Des 音が解決を代行している。

左手のトレモロは群衆のざわめきの表現であろうと想像する。国歌が遠くから聞こえてくる中、はるか彼方で打ち上げ花火が上がる。「ラ・マルセイエイズ」は解決しないまま余韻を残して消えていく。

(譜37)

90 *de très loin 大変遠くから*
Encore plus lent もっと遅く
 ソノ ソノ ミド 半ずれ
 「ラ・マルセイエイズ」の引用
 [trem.]
 8^{va} basses
aussi léger et pp que possible 出来る限り軽く、そして pp に
 ↓ (I)

95
 解決なし 3
 解決
 8^{va} basses

(... Feux d'artifice) ... 花火

福 田 由紀子

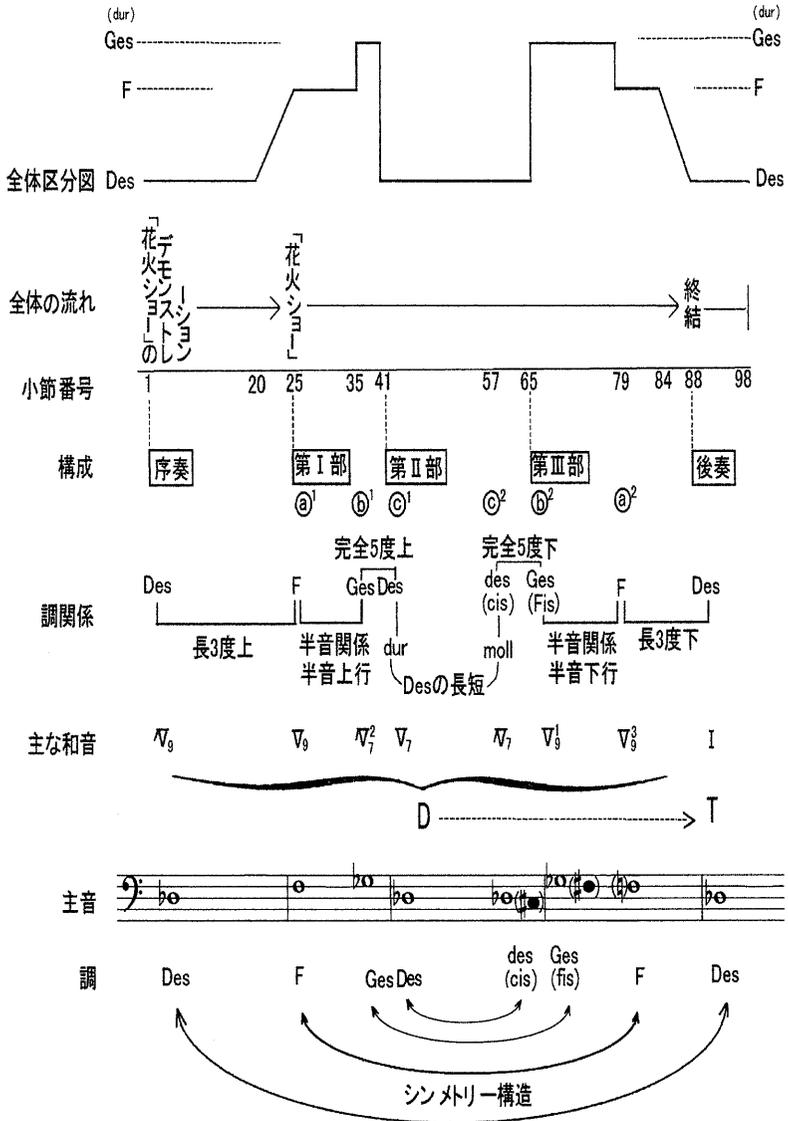
曲全体を区分図、構成的な局面、調と和音などと対応させてみた（図 1）。全体が、シンメトリックな構図で作曲されていることが分かる。

各部分の主な調を抜き出してみると、序奏と中間部と後奏が主調の Des-dur、第 I 部と第 III 部が Ges-dur と F-dur で書かれている。第 II 部は Des-dur と des-moll である。

調関係も長 3 度の上下、半音関係の上下行、Des の長短、完全 5 度の上下でシンメトリーになっている。

和音は、後奏で主調の I が出てくる以外は、主に各調の V の各種形体が使われている。

(図 1)

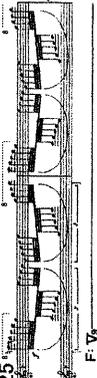


花火ショープログラム

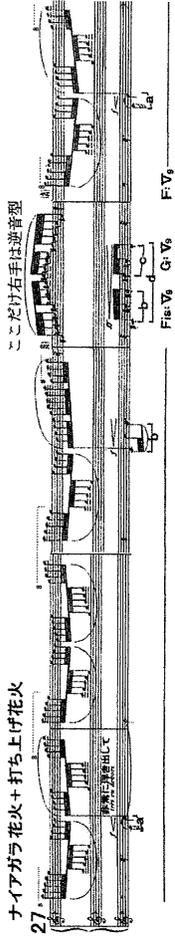
部	番号	名称	音型	準備	使用
第I部 (主な調) (小節)	25	ナイアガラ花火			
	27	ナイアガラ花火			
	27	打ち上げ花火			
	32	したれ柳花火			
	33	ナイアガラ花火			
第II部 (主な調) (小節)	35	打ち上げ花火			
	35	逆さナイアガラ花火			
	38	したれ柳花火			
	41	ナイアガラ花火			
	41	打ち上げ花火			
第III部 (主な調) (小節)	45	連発小型花火			
	45	打ち上げ花火			
	53	ロケット花火			
	57	準備			
	57	音型 a と a 使用			
第IV部 (主な調) (小節)	65	したれ柳型花火			
	65	打ち上げ花火			
	67	星のきらなめき			
	68	したれ柳型花火			
	68	打ち上げ花火			
第V部 (主な調) (小節)	71	準備			
	71	音型 d 使用			
	76	準備			
	76	音型 c と c 使用			
	79	ロケット型花火			
第VI部 (主な調) (小節)	82	ロケット型花火			
	82	打ち上げ花火			
	85	連発花火			
	85	速射スター花火			
	87	三玉花火			

第I部

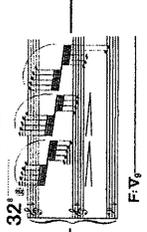
① ナイアガラ花火



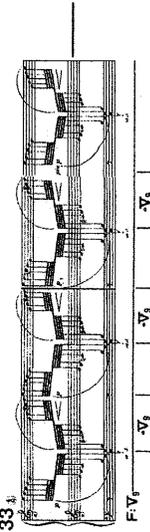
ナイアガラ花火+打ち上げ花火



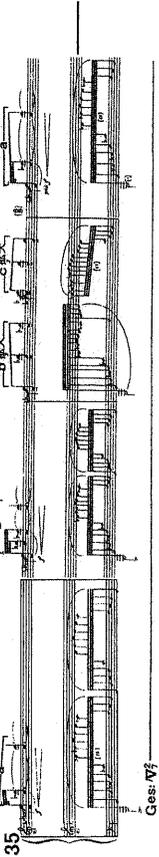
しだれ柳花火



ナイアガラ花火



② 打ち上げ花火+逆さナイアガラ花火



ロケット花火

53

速くする
強弱を繰り返す
G:V₆

準備 (音型 a と a 反使用)

57

速くする
強弱を繰り返す
G:V₆

テスト打ち上げ (音型 a 使用)

61

速くする
強弱を繰り返す
es: I

第三部

⑥ したれ柳型打ち上げ花火

65

速く、そして強く
強弱を繰り返す
es: V₇

星のようならめき

67

速く、そして強く
強弱を繰り返す
es: V₇

【注1】

Wagner (Richard Wagner・独1813～1883) 作曲、楽劇「トリスタンとイゾルデ」のことである。

ぼかしやだましの原理は、この前奏曲に使われている『トリスタン和音』からきていると思われる。

トリスタン和音 ($\overset{\vee}{V}_7^2$) は長い倚音が入っているが、こういう形の和音は存在しない。ところがあたかも存在するように響かせる。というのは es-moll の II_7 の響きがするからであるが、実際を見ると II_7 ではなくて、長い半音の倚音が組み込まれている。これは一種のだまし、あるいはぼかし効果である。

ワーグナー：「トリスタンとイゾルデ」前奏曲

トリスタン和音

a: I — $\overset{\vee}{V}_7^2$ $\overset{\vee}{V}_7^2$ V_7
 EHψ — EHψ
 (es: II_7 $\overset{\vee}{V}_7^2$)

【注2】

花火は「おもちゃ花火」「打ち上げ花火」「仕掛け花火」に分類されるが、パリ祭の花火ということで「打ち上げ花火」と「仕掛け花火」の中から、この曲中で使われている主な花火を簡単に記す。

《打ち上げ花火》

「玉」とよばれる紙製の球体に「星」と呼ばれる火薬を詰めて打ち上げる花火である。打ち上げと同時に導火線に点火され、所定の高さに到達すると、導火線が燃え尽きて「玉」が破裂し「星」が飛散する。この時「星」には光の尾を引きながら燃焼するもの、落下途中で破裂するもの、色が変わるものなど様々なタイプがある。

「しだれ柳」と呼ばれる花火は打ち上げ花火の一種。

「三尺玉」は到達高度600m、開花径550mの大玉花火。

≪仕掛け花火≫

複数の花火を利用するなど作為的に仕掛けを施した花火である。
例えば次のようなものがそうである。

「ナイアガラ」 速火線で連結した焰管を数十メートルに渡り一列
につるし点火によって火の粉が一斉に流れ落ち
るもの。ナイアガラの滝から。

「スターマイン」 代表的な仕掛け花火。速射連発花火で大量の玉
を連続的に短時間で打ち上げる。

「ロケット」 竹筒などに火薬をつめた筒を取り付け、火薬の
噴射推進力により上空へ打ちだすもの。

—Wikipedia より抜粋—

【注3】

構造アゴーギクとは、音楽構造そのものから自然に生まれてくる
流れの変化（加速、減速）のことをいう。

【注4】

「花火」のような、一見、分析が困難に思われる曲を、比較的容
易に分析できる方法があるということです。それは、その曲の分か
りやすい基本的な音型—「花火」で言えばa、b、c、d—を「階
名」で歌ってみる、という簡単なことです。

元来、「調」と「和声」と「階名」とは三位一体であり、どれか
一つが分かれば、他の二つも分かります。ドビュッシーの曲では、
「調」や「和声」が曖昧で多義的なことが多いだけに、テーマや音
型の「階名」が分析の最有力な手がかりになります。

—2010年6月14日付 島岡譲先生からの手紙より抜粋—

「花火」で使われている音型a、b、c、dを全て抜粋してみた。
曲中の和声分析をそのまま載せた。

序奏 なし

第Ⅰ部 ㉑¹ 27小節

F: V_9 ————— Fis: V_9 G: V_9

㉑¹ 35小節

Ges: V_7^2

第Ⅱ部 ㉑¹ 42小節

Des: V_9 ————— Ces: V_7 C: V_9^4

㉑² なし

第Ⅲ部 ㉑² 65小節

Fis: V_9 (Ges) ————— G: V

68小節

Fis: V_9 (Ges) ————— V V V
G: As: A

①² 79 小節

F: V $\frac{3}{4}$ ————— Ges: V $_7$

82 小節

F: V $\frac{3}{4}$ ————— V V V V ———
F: Ges: G: As:

後奏

93 小節

II(I) ————— Des: I
Des-durの半ずれ (C-dur)

【注5】

階名には旋法的階名と調性的階名との2種がある。旋法的階名では、長調の主音をド、短調の主音をラと呼ぶ。従って、音階も、長調ではドレミファソラシド、短調ではラシドレミファソラとなる。他方、調性的階名では、長調でも短調でも主音をドと呼び、音階はどちらでもドレミファソラシドである。

一般には、旋法的階名が用いられるが、本論では調性的階名を用いた。それは、調性的分析においては、音階各音の調性機能を正しく把握することが不可欠であるが、調性音楽では長調と短調の各音階音の調性機能は一致するからである。

《C-dur と c-moll の階名》

調判定の決め手に階名を用いる際にも、調性的階名が妥当する。

—2010年10月30日付 島岡譲先生からの手紙より引用—

【注6】

「クリスタル和音」という言葉は島岡譲先生が創られた言葉である。定義は今野哲也さんの「クリスタル和音の定義」から引用する。

「クリスタル和音」とは、減7の和音を原和音として、その構成音が長2度上方転位し、偶成形体の「かたち」となった場合に生じる「ひびき」の名称である。また、クリスタル和音を生じさせる長2度の上方転位音を「クリスタル音」と呼ぶ。

【注7】

国歌「ラ・マルセイエイズ」の引用されている部分を載せる。

「花火」に使われている箇所

Music engraving by LilyPond 2.12.0—www.lilypond.org

IV 結び

「ぼかし」とは、わざと調性を曖昧にしているのであり、決していい加減に書いているのではないことが、分析を通して立証出来たと考える。

「F-dur、Ges-dur、es-moll、Des-dur、b-moll…かもしれない」という多義的な曖昧性、いわゆる「ぼかし」から始まっているため、調の特定が難しく、最後になってようやく調の正体が判明するという、一種の謎解きのような面白さも持ち合わせている曲である。

曖昧な調で書かれている「序奏」は、その時点では、調の特定は出来ない。

「花火ショー」の各部分で、長く出てくる調を書き出してみると「第Ⅰ部」はF-dur、Ges-durであり、ここにきて始めて伏線であったことが分かる。

「第Ⅱ部」はDes-durであるが、これも伏線であったことが分かる。しかし、主調がDes-durであると言えるだけの決め手はない。何故この中間部にDes-durが出てくるのか、構造自体も曖昧である。後半にcis-mollが出てくるが、これはエンハーモニックの書き換えでdes-mollと同じであるから、この中間部はDesの長短の調で書かれているということになる。ここは展開部の要素もあるので、音型を用いての展開や、色々な調の出現など多彩である。

「第Ⅲ部」ではFis-durになるが、これはエンハーモニックの書き換えでGes-durと同じである。後半のF-durから、「花火ショー」の最高の盛り上がりを見せる。

「後奏」がDes-durであると分かった時点で「序奏」もDes-durであると判明する。「後奏」は非常に短いですが、Des-durの「序奏」と対応している。

この曲の調関係は（図1）を見れば一目瞭然であるが、シンメトリー構造になっている。

このような調構造の上に、花火に関する色々な工夫がなされている。

まず、Ⅴの和音が主に使われていることが挙げられる。Ⅴ₉、Ⅴ₉、Ⅴ₇[♯]、Ⅴ₇、Ⅴ₉等などⅤのオンパレードである。Ⅴの和音は緊張感を持っているので、「花火」の打ち上がる緊張をⅤで表現したのではないかと考える。DebussyはⅤの第5音を半音上げ下げして、平凡でないドミナントの響きを好んでいることが分かる。Ⅰは解決する和音として最後に出てくるだけである（第61～64小節は例外）。

打ち上げ花火の音型 a、b、c、d も **後奏** で I 度上に書かれている以外は、全て V の和音上に書かれている。

曲中には上下行の音階や、谷型山型の音型、分散和音が多く用いられているが、純粋な分散和音だけではなく、必ず間に音階が入っている。

この曲は、特に異名同音の書き換えが目立つ。また、3 全音関係で動いたり、全音音階和音が用いられたり、半ずれ調で書かれたりと、「ぼかし」を増幅させる手法も多く用いられていた。

Debussy の作品の素晴らしさは、曲を聴いているだけでそれぞれの場目が目に浮かぶように作曲されていることである。如何に緻密に構想を練っているかが窺える。

この緻密な構成力と、調性の技術を駆使して「ぼかし」は成り立っているのである。

参考文献

- ・「総合和声 実技・分析・原理」 島岡 譲 執筆責任
音楽之友社出版 1998年
- ・近代和声の系譜 国立音楽大学大学院修士論文 遠藤信一
—ドイツロマン派からフランス近代への和声の変遷— 1991年
- ・ドビュッシーとピアノ曲 マルグリット・ロン著／室淳介訳
音楽之友社出版 1969年9月
- ・ドビュッシー・プレリュード第2巻演奏の手引き P・コラジオ 中村菊子 渡辺寿恵子共著
全音楽譜出版社 2004年12月
- ・ドビュッシーのピアノ曲集VI 安川加寿子 校註
音楽之友社出版 1975年3月
- ・ドビュッシーピアノ作品全集X 中井正子 校註
前奏曲集 第2巻 株式会社ショパン出版 2007年11月
- ・ドビュッシー プレリュード第2集 全音楽譜出版社
- ・標準音楽辞典 音楽之友社出版

福 田 由紀子

引用文献

- ・島岡譲先生からの手紙2010年6月14日付・2010年10月30日付
- ・今野哲也さんからの手紙2010年4月6日付

[謝辞]

論文作成にあたり、ご指導を賜りました島岡 譲 国立音楽大学名誉教授
に厚く御礼申し上げます。

(本学教育学部非常勤講師)